

学習過程における集団の機能と構造に関する研究

太田 秀人（市川市立中国分小学校）

要 約

学び合い集団の研究が行われ、多くの成果を上げている。しかし対象の大半はグループまたは学級であり、グループと学級全体との関連に関しては十分に明らかにされていない。

本研究は、グループで構築された概念が学級全体として合意されていく過程を観察し、問題解決の過程における集団の機能と構造を明らかにすることを目的とした。

子どもは必要感が生じると、既成の枠に囚われずに、自ら多様な集合体を形成したり活用したりしながら、問題を解決していることが明らかになった。

集団に即した目標の共有化により、その集団の機能がより活性化されると考える。

〔キーワード〕 集団形成 問題解決 目標 方法 妥当性

研究の背景と目的

これまでの一斉授業の欠点として、画一性、受動的等が指摘され、その打開策としてグループ学習が盛んに行われてきた。そして学習者の相互作用に着目した研究も盛んに行われてきたが、これらの先行研究を見直してみると、次の2点が課題として挙げられる。

1点目は、グループ内、学級全体を研究対象とし、その関連には殆ど触られていないことである。川合(1998)が、グループ内を対象として、普段の理科学習のままではコミュニケーションスキルが表出せず、必然性がなければ、その話し合いに、互いの知識や経験をやり取りするような活動は見られないことを明らかにしている。しかしそれは、グループ内における様相であり、グループ内で構築された概念や人間関係が、いかに学級全体と関連しているかは明らかにされていない。また、稲垣ら(1998)は、「教師や子ども達は、複数の発話と接触することを通して、多種多様な声・社会的言語・言葉のジャンルと出会っていたことが例証された。」と述べている。しかし、学級全体での会話であり、グループとの関連までの記録、分析は行われていない。

2点目については、研究対象が教師側の意図した形態に集中し、児童自らが形成する集合体に関する研究が殆どみられないことである。古田(2000)が、自分のグループでの話し合いの他に、他のグループとも関わりながら情報の発信・受信

をして学びのネットワークを自ら作り出そうとしていることを明らかにしている。そして、既成グループに決めてしまうことは、学び合いのネットワークを制限してしまい、話し合い活動・共同作業を自由グループで行うことにより、学び合い文化が向上することを明らかにしている。しかし、学びのネットワークを自ら作り出した後、学級全体との関連について記録、分析は行われてはいない。また、ここで述べている既成グループ、自由グループとは、グループの成員に関することであり、グループ自体を構成することは、教師側の意図によるものである。学級やグループとは、教師側で作ら上げたフォーマルな形態であるのに対して、「他のグループとも関わる」という「グループ間の相互行為」の場は、子ども自らが動き出し形成したインフォーマルな集合体である。

以上のことから、本研究の目的は、「グループ間の相互行為」を1つの集合体として位置付けた上で、グループ毎に構築された概念が、学級全体として合意されていく過程を観察し、その学習過程における集団の機能と構造を明らかにすることとした。

調 査

千葉県公立A小学校6年32名を対象に、2002年10月中旬～11月下旬まで、理科「水溶液の性質」の単元で調査を行った。調査者は参与観察を行い、教室全体の様子は2台のVTR、グループ内の会話は11台のテープレコーダーで記録した。

結果

1, アンケート調査

児童は、教師の意図したグループや学級の場合だけではなく、自らの必要感に応じて、グループ以外の友達に働きかけながら、学習を進めていることが明らかになった。

2, グループ内の話し合いの特徴

(1) グループ内では、主に「解決のための方法」を話し合っている。

(2) 解決のための方法を共有したり、その妥当性を確認、共有したりしながら進めている。

(3) グループ内では話し合いの内容が変化しにくい傾向がある。

以上のことから、グループ内では「解決のための方法」を、共有化したり妥当性を高めたりしているが、グループ内での話し合いだけでは変化しにくいことが明らかになった。

3, 学級全体の話し合いの特徴

(1) 学級全体での話し合いでは、主に目標の明確化及び確認と合意形成を行っている。

(2) 学習全体の話し合いでは、前期では目標の明確化及び確認が主であり、学習が進むにつれ、妥当性の確認が主となってくる。

(3) 目標の明確化は、授業開始直後に多く、目標の確認においては、授業終了直前に多い。

以上のことから、学級全体では、主に目標の明確化・確認と合意形成を行い、その比重は時期により異なることが明らかになった。

4, グループ間の相互行為における話し合いの特徴

(1) 数人とグループ間の相互行為では情報の受信が主であり、グループ同士の相互行為では、主に互いの情報の共有化を行った上でその妥当性が確認・共有されている。

(2) グループの活動状況の可視化により、グループ間の相互行為の形成が促進される。

以上のことから、グループ間の相互行為では、グループ同士では情報の共有化及び妥当性の確認がされ、活動状況の可視化によりグループ間の相互行為の形成が促進されることが明らかになった。

5, グループ・学級とグループ間の相互行為との関連

(1) 自分達の必要感に応じて、グループ間の相互行為ができるようにグループの枠を越え新たな

集合体を形成し、情報を獲得しながら、話し合いを発展させている。

(2) グループ間の相互行為の形成が、学級全体での合意形成に多大な影響を与えている。

以上のことから、自らの必要感に応じてグループの枠を越え新たな集合体を形成することで、情報を獲得しグループ内の話し合いを発展させるとともに、集合体の形成はグループ内に学級全体にも多大な影響を与えていることが明らかになった。

考察

今回は、学級（大集団）の中のグループ（小集団）ということであったが、大集団が学年、学校の場合等と考えることも可能である。そして、問題解決のために自ら動きだし、活動範囲を広げていくことは、学習の単元構成にとって今まで以上に考慮する必要がある。

全体として共有していく目標が、グループで行える内容ではなく、学級全体で行う内容であれば、必然的にグループで練り上げられた意見や考えなりが学級全体の場へ立ち返り、生かされてくると考える。目標の内容がグループで行われるレベルなのか、学級で行われるレベルなのかを意識していくことが肝要である。

結論

児童は必要感が生じると、既成の枠に囚われず自ら多様な集合体を形成したり活用したりしながら問題解決を行っていることが明らかになった。

今後の課題

1, 目標のレベルの違いによる、活動の中心（集団）の変化と活性化

集団に即した目標の共有化により、その集団の機能が活性化されることを明らかにする。

2, グループ間の相互行為の活性化

学級集団（小集団）を越えた集合体の形成によって、学年全体（大集団）としての相互行為に変化が見られるかを明らかにする。

【引用文献・参考文献】

- 1) 古田 豊 : 小学校理科学習における学び合いの発達に関する研究, 上越教育大学修士論文, 2000
- 2) 佐藤 公治 : 発達と学習の社会的相互作用論 (1)(2), 北海道大学教育学部紀要, 1992, 1996
- 3) R. ブラウン (黒川正流, 橋口捷久, 坂田桐子訳): グループ・プロセス 集団内行動と集団間行動, 北大路書房, 1993